

に出回らない、家庭に伝わる伝統食は扱わない。それは、筆者が、非ヨーロッパ圏からの観光客の視点でレストランをめぐり、商業化された料理をとおして、ヨーロッパを相対的に理解しようとしたからと、評者は解釈する。本書は、レストランの華やかな料理を楽しむ文化を題材として、その背景にある文化の商品化、および貧困と民族の問題に切り込む。また、筆者は第10章で、ヨーロッパの支配を受けなかった日本人だからこそ見つけることができる、ヨーロッパ特有の姿があると主張する。この言葉が、地誌学者としての筆者のスタンスを明瞭に示すものである。海外研究者は、外部からの視点で、現地の人々が気づかないことを発見できれば、研究者冥利につきる。

最後に、本書は、地理でおなじみの統計分析やフィールド調査によるミクروسケールの土地利用図をあまり示しておらず、その点で物足りないと感じる方もおられるかもしれない。しかし、筆者はE-Journal GEOに「地理紀行」を創設した際の編集委員長であり、地理学の方法論と知見を商品化して、地理学のフィールド調査の楽しさを発信する必要性を力説した当の本人である。そのことを考慮すると、本書の意図が明確となる。本書により、地理学のフィールド調査の楽しさが一般に共有されることを、評者は願う。

(根田克彦)

文 献

- 荒木一視 (2007) : 農業の再生と食料の地理学. 経済地理学年報, 45, 265-278.
 伊藤章治 (2008) : 『ジャガイモの世界史—歴史を動かした「貧者のパン」』中公新書.
 加賀美雅弘 (2003) : ヨーロッパにおけるエスニック集団の文化についての覚書き. 学芸地理, 58, 11-22.
 コリンガム, L. 著, 松本裕訳 (2018) : 『大英帝国は大食らい: イギリスとその帝国による植民地経営は、いかにして世界各地の食事をつくりあげたか』河出書房新社.

白坂 蕃・稲垣 勉・小沢健市・古賀 学・山下 晋司編: 『観光の事典』朝倉書店, 2019年4月刊, 450p., 10,000円(税別)

本書は現代における観光事象を網羅的に提示した日本初の大型「事典」であり、その主眼は観光事象全体をカバーする枠組みの提示と地域への投影を解き明かすための視点の提供に置かれている。本書の「まえがき」にあるように、観光は国際的な人の交流や国内の地域経済にとって極めて重要なファクターとなっている。近年では観光者のニーズも多様化し、エコツーリズムやグリーンツーリズムといったオルタナティブな観光形態も台頭しつつある。

また、インバウンド市場の拡大も無視することはできない。2000年以降、訪日外国人旅行者数はほぼ一貫して増加傾向を示しており、その数値は2013年に1,000万人を超え、2018年には3,000万人を突破するなど、年々過去最高を更新している。他方、訪日外国人旅行者数の伸び率は徐々に減少傾向に転じており、インバウンド需要は急成長期から継続的な成長フェーズへと転換期を迎えている(磯野, 2019)。こうしたインバウンド需要の質的变化に伴って、観光目的地では外国人旅行者の受入環境の整備やその拡充が不可欠となっており、日常空間を活かした観光まちづくりも全国展開をみせるようになってきた。しかし、近年では世界遺産登録地をはじめ、インバウンド・ツーリズムの成長によって観光者の過剰が目立つようになり、「オーバーツーリズム」や「観光公害」といった諸課題が世界各地で顕在化しつつある(呉羽, 2019)。

このように、観光をめぐる状況は極めて急速に変化しており、世界各地で様々なポジティブないしネガティブな影響が発現している。こうした観光による地域へのインパクトを解き明かすには、

複合的な社会現象である「観光」に対する学際的なアプローチが必要となる。しかしながら、観光研究に関わる学問分野は多岐にわたり、その研究方法や理論、学術用語は一様ではない。また、観光への関わり方も学問的な観光研究と実務的研究と二つの異なった立場があり、両者間に大きな乖離が生じている。ゆえに研究分野の垣根を越えた総合科学としての「観光学」の確立が希求されていた。よって、多様性に富む観光事象を網羅的に提示し、グローバルスタンダードで観光を理論的に分析した本書の出版は、まさに時宜にかなったものと言えよう。

本書の章立てとそれぞれの項目数（括弧内の数字）は、「1. 観光の基本概念（31）」「2. 観光の行政と施策（25）」「3. 観光と経済（25）」「4. 観光産業と施設（20）」「5. 観光計画（25）」「6. 観光と地域（13）」「7. 観光とスポーツ（12）」「8. 観光と文化（21）」「9. さまざまな観光実践（27）」となっている。また、「日本観光年報」「日本の世界遺産」「観光関連法規」が付録として掲載され、末尾には12頁に及ぶ索引が付されている。以下、全9章の内容を簡単に紹介する。

1章では、「観光」や「ツーリズム」の全体を俯瞰するための基本概念が整理されており、観光事象の全体が俯瞰できるようになっている。また、観光の誕生や国内外の観光史についても丁寧な説明がなされている。2章では、観光における行政やその施策について記されており、観光を支える制度的側面や観光現象を推進する政策的側面が強調されている。3章では、観光と経済の関わりが紹介されており、経済的視点からみた観光分析の方法や観光の経済的意味が提示されている。4章では、経済的側面を超えて現代観光の根幹をなす観光産業を取り上げ、その現状や歴史、社会的役割について概観している。5章では、観光資源の発見や利活用、観光推進など観光地としての

展開に関わる観光計画の具体性を、その歴史を含めて説明している。6章では、様々な地域と観光がどのように関わっているのかを捉え、それを分析する方法を提示している。7章では、スポーツが地域にどのような影響を与え、どのような位置を「観光」に占めるのかを整理している。8章では、伝統的な祭礼や芸能といった文化と観光事象との関係性を多角的に描き出している。9章では、極めて多様化したテーマ性の強い観光形態（エコツーリズムやコンテンツツーリズム、ダークツーリズムなど）を概観し、その観光実践や分析手法について提示している。

本書の採録項目は199、執筆者は113名を数え、その内容は各執筆者の専門分野を反映して多岐にわたっている。よって、本書は観光事象の全体像を理解するのに有益であり、観光への興味と関心を深めるスタンダードな「観光の事典」として幅広く活用することができる。とくに産業としての観光は、旅行業や宿泊業、運輸業にとどまらず、飲食業や小売業、アミューズメント業、広告業、そして農林水産業や製造業などあらゆる産業に関係する裾野の広い総合産業である（高井・赤堀、2012: 4）。それゆえ、観光関連の自治体職員や観光関連産業の従事者にとっては利便性が高く、観光現象を網羅的に理解するうえで大きな助けになるだろう。

観光研究という立場で言えば、様々な学際領域との境界に位置する観光地理学の研究者や大学院生・学部学生に強く勧めたい一冊である。呉羽（2014）によれば、地理学で観光現象を分析する際に重要となる研究視点は「観光は人びとの空間的な移動を伴う行動であること」「特定の場所・地域が観光目的地として観光者を受け入れること」である。こうした視点の涵養に有益な情報が本書には多数収録されており、観光現象に関わる基礎的知識の確認や事象間の相互関係を理解す

るための専門的な事典として活用することができる。また、学域横断的な視点から地域を検証ないし診断可能な観光地理学は、観光の観点から地域創生などを推し進める際、多様な学問的研究と実務的研究とを結びつける紐帯としての役割を担うことができる。この文脈において、観光現象を網羅的に提示した本書は、「地域貢献」という高等教育機関（とくに地方国立大学）のミッションの達成にも大きく寄与する潜在力があると考えられる。

そして、本書にはコンテンツツーリズムやMICE、ジオパーク、インバウンドといった近年における観光研究のホットトピックスも収録されている。しかしながら、先に述べたように、観光をめぐる状況は極めて急速に変化しており、観光実践の形態は極めて複雑かつ動態的な様相を呈している。たとえば、一口にコンテンツツーリズムと言っても、その「地域に関わるコンテンツ」は非常に多岐にわたり、その題材もバラエティに富んでいる。インバウンド・ツーリズムに関しても、パッケージツアーを利用せず個人で旅行を楽しむ外国人旅行者が増加傾向を示しており、外国人旅行者のニーズも多様化かつ高度化を極めていいる。こうした状況下、近年では観光政策におけるナイトタイムエコノミー振興が注目を集めてお

り、池田（2017）はナイトライフ観光研究の動向とその具体性を展望している。また、日本では緒に就いたばかりではあるが、ナイトタイムを題材とした事例研究も確実に蓄積されつつある。このように、今日における観光形態は現在進行形で発展ないし多様化し続けている。したがって、本書を通して観光現象を網羅的に理解することは可能であるが、同時に読者自身で観光研究の新動向を把握すべく、常日頃アンテナを張り続けることも必要である。

（磯野 巧）

文 献

- 池田真利子（2017）：世界におけるナイトライフ研究の可能性と日本における研究の可能性。地理空間, **10**, 67-84.
- 磯野 巧（2019）：東京都渋谷区におけるインバウンド向けナイトツアーの展開。観光研究, **31**(1), 5-18.
- 呉羽正昭（2014）：日本の観光地理学研究におけるフィールドワークに関する一考察。人文地理学研究, **34**, 95-106.
- 呉羽正昭（2019）：オーストリア・ハルシュタットにおける世界遺産登録地の商品化－ヨーロッパの世界文化遺産登録地におけるオーバーツーリズムの分析。地理空間, **11**, 223-241.
- 高井典子・赤堀浩一郎（2012）：『訪日観光の教科書』創成社。